

# 寺報

平成二十七年十月  
第七十二号  
正念寺護持会発行  
常陸太田市久米町二十一  
電話 〇二九四一七六一二〇五八  
FAX 〇二九四一七六一〇一六九

## 蕎麦打ち教室報告

九月二十日に第一回目の蕎麦打ち教室を常陸太田市交流センター「ふじ」の調理室に於いて、ご門徒の和田政一様を講師に開きました。道具は調理室備え付けのものをお借りしましたが、蕎麦粉などは講師の和田さんが用意して下さい、ご厚意に甘えさせていただきました。

今回は、参加を予定されていたながら、残念ながら参加出来なかった方もいらっしやったのですが、五人の参加者で和田さんに面倒見ていただき、「あくダメだよ、これ。修正出来っかな？」「えっく言われた通りやったんだけど…」「そんな事言っつねえべよ」などとワイワイガヤガヤ



和気あいあいのうちに蕎麦粉とつなぎを丁寧にし、しかも素早く混ぜる事から始めて、水回し、捏ね、延ばしと作業は続いています。

先にも書いたように、言われた通りに作業をし

ているつもりなのですが、私たちの蕎麦は、柔らかかったり、中々きれいな四角にならなかつたりしては、その度ごとに和田さんに修正して戴きながら何とか形になりました。

最後は、蕎麦切りをして家に持ち帰る事になったのですが、出来上がった蕎麦の太さの色々な事…よく言えば個性的。悪く言わないまでも普通に言ったら不揃いの蕎麦に…

さすがに和田さんの蕎麦はみんなそろってきれいにしかも細く切れておりますが、この太い細い、揃ってる不揃いの差は、十二月の最終回までに講師の和田さんの麵に近づく事が出来るや否や。

上達具合の結果報告は、年越し蕎麦を食べた後にもするとして、上手下手は置いておいて、自分の打った蕎麦は、何物にも代えがたい味がしました。



第二回	十月十八日
第三回	十一月二十二日
第四回	十二月二十日

今後の予定

# しんらんさま

親鸞さまは、鎌倉時代に活躍され、その一生を法然聖人のお弟子という自覚を持って過ごされた方でした。しかし、親鸞聖人のひ孫にあたる「覚如」という方が、親鸞さまを本願寺の初代(宗祖)として定め、それ以降親鸞さまが初代で、二代目を孫の如信、三代を覚如として「血縁」によつて本願寺の系統をつないでいくという伝統が生まれました。

ところで、親鸞さまの事について私たちはどのくらい知っているでしょうか。京都でお生まれになり、法然聖人のお弟子になり、その後越後国(現新潟県)に流罪になって、勅免の後は常陸国(現茨城県)に入り各地を布教して回り、晩年に京都に戻られたという大雑把な事は知っていますが、細かい事についてはほとんど知らないはず。それこそ、親鸞聖人に関しては真宗系各宗派に伝わる伝記の他に、親鸞さまの存在を示す公的な文書が残っていないのです。そのような事から、一時親鸞さまは実在していないのでは?と言う声も聞かれた事があったほどでした。そんな親鸞さまについても、最近では研究が進みつつあり(とは言っても各宗派の伝記をベースにしながらかつて進んでいるようですが)、新たな親鸞像も組み立てられつつあります。これから何度かに渡つて、そんな親鸞さまについて、松尾剛次氏の「親鸞再考」をベースに、その他の資料も参考にしつつ書き連ねていこうと思っております。

さて、親鸞さまは、承安三(一一七三)年にお生まれになった事は



「尊号真像銘文」の奥書によりハッキリしております。ただ、誕生日については、現在旧暦の四月一日(新暦:五月二日)とされてますが、ハッキリしてはおりません。ご両親については、父は「日野有範」という下級貴族であつたと言われております。母については、これまたハッキリしていません。真宗高田派に伝わる「親鸞聖人正明伝」には、源義家の孫「貴光女」とされています。また、大和高田市の名称寺に伝わる「日野氏系図」には、源義賢の娘(源義仲の妹)で「吉光禪尼」であると言います。さらに、またまた真宗高田派に伝わる書物ですが、「親鸞聖人正統伝」並びに「正統伝後集」を読むと源義親の子で名を「吉光女」と言うが出て参ります。これは、発音によつて漢字を当てる事があつた事を考えると「貴光女」吉光女」と捉えれば、文字の違いは然したる問題にはならないと思えます。

ともあれ、親鸞さまは、承安三年に日野有範を父とし、源氏の系統である母との間に誕生したと考えられるでしょう。そうして親鸞さまは成長していくわけですが、九歳の時に得度・出家をいたします。ところで親鸞さまは、五人兄弟の長男でした。とすれば、家を継ぐ立場にあつたわけですが、母を亡くした無常観から得度出家をしたと伝えられておりますが、現在の研究では、その時父親は健在であつたらしいと言われておりますので、下級貴族でもあり、将来的にも暮らしが成り立たないとも考えられていたのかもしれない。それを裏付けるように、兄弟全員が出家していると言う事実があります。

さて、出家をして比叡山に登られた親鸞さまの暮らしはどのようなものだったのでしょうか?



(次へ続く)



## 生活の中の仏教語

先に起きた常総市を流れる鬼怒川の決壊は、未曾有の被害をもたらした、などと使われる『未曾有』は、古代印度のサンスクリット語で「希有なる事」を表す「アドウブタ adbhuta」を訳して「未曾有（未だかつて有らず）」と言う文字を当てたものです。

ちなみにこの文字の発音は「みぞう」であって、どこかの総理が言ったように「みぞうゆう」とは読みません。

元々使われていた仏教の言葉としての「未曾有」は、世間一般の見方と誓う仏教の見方（真理）や仏陀の大変すぐれた功德を表す言葉でした。

こんな話があります。アングリ・マラー（本名：アヒンサー）と言う人は、ある出来事から殺人鬼になり、その親指を首飾りにしておりました。そんな殺人鬼が、お釈迦様の弟子になり、修行をしていく中で「智慧」を開き、穏やかになっていきましたが、アングリ・マラーに殺された人の親族は、彼を許す事が出来ずに、見かけると石を投げつけました。彼は、それにじっと耐えておりましたが、ある時大ケガをいたします。そして、お釈迦様の膝の上で静かに息を引き取ったと言われております。そして息を引き取った彼を見て、お釈迦様は「過去にどのような罪を犯しても、改心して清らかな心になるならば、彼は雲を離れた月のように輝く。彼は涅槃に達した」と言われたと伝えられております。

私たちから考えれば、殺人鬼であった者を躊躇無く弟子に加えたならば輝く人になると言われた事も「未曾有」でありましょう。言い換えれば、お釈迦様の開かれた悟りがそれだけ「未曾有」なものであったのでしょうか。



## お斎番の様子

寺の法要のたびに、その準備に沢山の方々にお手伝いを戴き、本当に感謝しております。とは言いながらも、「お斎番」ってどんな事をするんだろうとはよく聞かれておりました。ですので、以前の「お斎番」の折りに撮った写真で紹介させて戴きます。今回は、お餅つきをしてその餅をくりぬき、次の日に餅通しをしている光景をご覧下さい。

今後も機会を見つけて、お斎番の様子をご紹介させて戴きます。



## 感謝録

ご寄付をいただきました方々を、感謝を込めてご報告させていただきます。

一、父の永代経として

金 壱拾萬円

大曾根 和美様

一、父の永代経として

金 壱拾萬円

小澤 久様

一、父の永代経として

金 壱拾萬円

酒井 力様

今年も沢山のお仏供米をご奉納戴きました。

ここに謹んでご報告させていただきます。

十月九日現在

常陸太田市

井坂 孝一様

井坂 哲也様

井坂 照雄様

井坂 友之様

井坂 豊子様

井坂 浩様

小菌 篤様

小菌 金次郎様

小菌 達雄様

小菌 浩文様

那珂市

小菌 光晴様

関 守様

仲村 義信様

平山 昌邦様

會澤 宏様

大曾根 虎夫様

樫村 一洋様

樫村 欣也様

樫村 勤様

樫村 利弘様

樫村 光廣様

小澤 喜一様

小澤 三喜男様

萩野谷 定之様

箕川 峻様

箕川 庄造様

吉澤 国裕様

吉澤 美佐男様

ご奉納戴きましたお仏供米は大切にに使わせて頂きます。



## 住職雑感

暑さ寒さも彼岸まで、とはよく言ったもので、彼岸を過ぎたら本当に涼しくなりました。これからの季節、紅葉も見事になってきますので、旅に出かけるのにも良い季節ですね。

でもこの時期、浄土真宗では、どの寺でも報恩講法要をお勤めしておりますので、私たちは紅葉を見に行くどころではありません。十一月中旬に当山の報恩講が修行されるのはもちろん、十月下旬から十二月上旬にかけては、浄土真宗のどこのお寺でも報恩講で忙しくしておりますので、紅葉狩りに行ったなどと言う話を聞くと、ちよつと羨ましくなったりもします。

そうして報恩講ラッシュが収まりますと、すぐに年末の忙しさがやってきます。お取り越し、除夜の鐘、年が明けて元旦会等々。そうこうしているうちに、十三日から十五日までご本山の報恩講にお参りをさせて戴きます。

底冷えのする京都ですが、親鸞聖人が八百年以上前にご苦勞下された事が、平成の現在まで繋がっている事に思いを馳せながら、境内にももる提灯の灯りに導かれて、阿弥陀堂・御影堂へお参りさせて戴く。阿弥陀堂から御影堂へ移る頃になると、放射冷却のせいか益々寒くなりますが、命あればこそ、この雰囲気味わえて本当に良かった、と毎年の事ながら、つくづくそう思います。

合掌